

琉球大学学術リポジトリ

南琉球方言における同化と異化

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: かりまた, しげひさ, Karimata, Shigehisa, 狩俣, 繁久 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17067

南琉球方言における同化と異化

かりまたしげひさ

1 はじめに

南琉球方言にみられる音韻変化には、狭母音化や広母音化などの母音変化があり、摩擦音化、破裂音化、破擦音化、口蓋音化、鼻音化、無声音化、有声音化などの子音変化がある。これらの音韻変化は、調音方法、調音点、声門の状態など、フォネームの調音的特徴に関する音韻変化である。摩擦音化とはいつでも $p > h$, $k > h$, $p > f$, $t > s$, $ts > s$ などの破裂音・破擦音の摩擦音化, $r > s$, $r > z$, $j > s$, $w > z$ などの流音, 接近音（半母音）の摩擦音化, $u > v$, $i > s$ などの母音の摩擦音化などさまざまあるし、その変化の要因や変化のための条件もいろいろみられる。南琉球方言には音挿入¹⁾、音消失²⁾、音融合³⁾、音位転換⁴⁾、音分割などの音韻変化もみられる。音挿入、音消失、音融合にも摩擦音化や鼻音化、破裂音化などの音韻変化がからんでいるし、いろいろなタイプのものがみられる。

本稿では南琉球方言におきたさまざまな音韻変化を概観する。

2 同化と異化

前後するふたつのフォネームの一方から他方への、あるいは相互の影響のもとに、一方のフォネームの音韻的特徴の一部あるいは全部がもう一方に付与されて音韻的特徴に変化をもたらしたり、あるいは二つのフォネームが相互に音韻的特徴を交換して変化したりする音韻変化は「同化」とよばれる。同化は、前後に配置されたフォネームの相互作用によって生じていて、その音韻的特徴におおきく依存した変化である。

同化は、影響をあたえあう近隣のフォネームの位置によって「隣接同化」と「遠隔同化」があり、それぞれが影響をおよぼす方向によって「進行同化」「逆行同化」「相互同化」がある。影響をおよぼす程度によって「完全同化」と

「部分同化」がある。音韻的特徴の一部が影響をあたえて変化させるのが部分同化であり、同一の音韻的特徴をもつように影響をあたえるのが完全同化である。

調音方法や調音位置などの影響をあたえる調音上の特徴によって、摩擦音化、鼻音化、硬口蓋音化（以下、単に口蓋音化という）、唇音化があり、声門の状態によって無声音化、有声音化、喉頭音化などがある。二重母音の同化のように筋弾性的な条件がつよく関与しておきるものがあるが、摩擦音化、鼻音化、無声音化、有声音化などには空気力学的な条件がつよく関与しておきる同化もある⁵⁾。

同化とはさまざまな音韻変化を総称したものであり、琉球方言にもさまざまな同化による音韻変化がみられる。

いっぽう、同化によらずに引き起こされる破裂音化、破擦音化、摩擦音化、鼻音化、狭母音化、無声音化、有声音化などがあり、その音韻変化の要因もさまざまである。このような、ある特定のフォネームが前後に配置された別のフォネームから相対的に独立してそれまでとは異なる音韻的特徴をもつようになる音韻変化を「異化」とよぶことにする。「異化 dissimilation」という用語のこのような使用は、「同一ないし類似した音が音連鎖のなかで隣接ないし近接した場合に、一方が他方とは異なった音に変わる現象で、「同化 (assimilation)」に対立する」という一般的な使用とは少し異なり、さしめず現象の範囲はひろい。しかし、「同化に対立する」という異化の説明を拡大して使用するものである。異化とは、すなわち、同化によらないさまざまな音韻変化を総称するものである。異化の要因も筋弾性的な条件がつよく関与するばあいもあるし、空気力学的な条件がつよく関与するばあいもあるし、その他の要因によるばあいもある。

異化が前後のフォネームから相対的に独立した音韻変化であるとはいっても、単語を構成する音節構造のなかで個々のフォネームが孤立して存在しているわけではなく、前後に配置されたフォネームは、相互に密接にむすびついていて、当該のフォネームが音韻変化するための、すなわち、異化がおきるための環境・条件を提供していて、間接的に影響をあたえている⁶⁾。

2.1 同化と異化の複合

異化と同化の結果、単語の音節構造のなかでのフォネームのふるまい方、あるいはフォネーム同士の関係のし方に変化が生じるが、それを音挿入、音消失、音融合、音分割などのタイプにわけることができる。

異化と同化は、性格のことなる音韻変化であるが、特定の音環境をもった単語のなかで同化と異化が連続しておこり、一方がもう一方をひきおこすための条件や前提をつくりだしているばあいもある。複合語や派生語をふくむ単語や単語の文法的な形のなかで生起する異化と同化の連続と複合をていねいにみていくことによって、音韻変化のおきた順序をしる手がかりを得ることができるし、現在の状態を理解するのに必要である。

2.2 音消失と音融合

宮古大神島方言の ffa（草）も、母音uの摩擦音化、kの摩擦音化と音融合による音消失、進行同化による唇歯音化（s>f）という、複数の音韻変化の結果の語形である。

大神島方言を含む多くの宮古諸方言では*ura>yva（おまえ）、yvi（売れ）、yvan（売らない）の語形にみるように、語頭の*uは、つよい呼気流に対抗する唇歯のふんばりによって有声の唇歯摩擦音vに変化している⁷⁾。*kuのuも同じ破裂音の閉鎖の開放にともなうつよい呼気流によって摩擦音化してvになると同時に、結合するkを唇歯摩擦音に変化させるが、kは、vをfに無声音化させる。*kの側からみれば後続のvの声門の状態を変えて無声音化させる部分進行同化であり、*vの側からみれば結合するkの声門の状態は変えずに調音方法と調音位置を変えた隣接部分逆行同化であるが、両者がまったく同じ音韻的特徴をもつようになって音融合してfが生成されるので、隣接部分相互同化による音融合で成節的な子音fができたとも考えることもできる。

大神島方言ではkuから生成されたfが後続のsを唇歯音化させている。同じ変化がffu（糞）、ffu:（葉）、ffaka（臭い）、f:（櫛）でもみられる。なお、竹富島方言のssa（草）は、f₁saあるいはφsaの第2音節めのsの逆行同化による摩擦音化がおきた語形であろう。

- *kusa > kysa 異化・唇歯摩擦音化
- *kysa > fsa 隣接・部分・相互同化による音融合（唇歯摩擦音化と無声音化）
- *fsa > ffa 隣接・完全・進行同化による摩擦音化

多良間島塩川方言の po:（蛇）は、その祖形を *pabu とすると、母音 u の摩擦音化、b の脱落と音融合、摩擦音の弱化と音融合という、複雑な音韻変化の結果の語形である。

多良間島塩川方言の *pabu の第二音節めの *bu の u も、つよい呼気流によって v に変化（*bu > by）したあと、y に先行する b を完全逆行同化によって唇歯音化させて融合（*paby > pay）がおきたと考える。ここでは両唇から唇歯へという調音点の移動と、破裂音から摩擦音へという調音方法の変更とがおきて、y に融合している。この語形は他の宮古諸方言と同じ pay である。その後、母音に後続する位置での y の摩擦がよわまって接近音 ɥ に変化（*pay > paɥ）し、さらに母音 u に変化して二重母音 au が発生（*paɥ > pau⁸⁾）したのち、a の広母音性と u の奥舌性と狭母音性が相互に影響をあたえあって、長母音 o: に融合（pau > po:）した部分相互同化である。

- *pabu > paby 異化・唇歯摩擦音化
- *paby > pay 隣接・部分・逆行同化による音融合（唇歯摩擦音化）
- pay > paɥ 異化・弱化による接近音化
- paɥ > pau 異化・弱化による母音化，調音点の移動
- pau > po: 隣接・部分相互同化による音融合（広母音性と奥舌・狭母音性）

2.3 音融合と音分割

宮古島平良下里方言の kju:（今日）、宮古大神島方言の ky:（あるいは kɔ:）は、相互同化による音融合とその後の音分割によって生成された語形である。音分割とは、1 個のフォネームが前後に連続する 2 個のことなるフォネームに syntagmatic に分割される音韻変化をいう。

祖形を *kepu とみると、語中 p の摩擦音化 $p > \phi$ 、有声音化と唇音退化 $\phi > w = u$ を経て発生した二重母音 iu の i の前舌狭母音性⁹⁾と u の奥舌円唇狭母音性が隣接相互部分同化によって融合して第二次基本母音の円唇前舌狭母音 y (あるいは \emptyset) が生成されて大神島方言の ky: (今日) ができたが、下里方言では ky: の前舌狭母音としての特徴 (口蓋音性) が子音部分 kj にのこり、円唇奥舌性が母音 u に分割されてできた語形である¹⁰⁾。大神島方言では ky: の唇音退化した ki: で発音する話者がふえている。

*kepu > ke ϕ u	異化・摩擦音化
*ke ϕ u > keu > kiu	異化・接近音化, 狭母音化
*kiu > ky:	隣接・部分・相互同化
ky: > kju:	音分割・口蓋音化と円唇奥舌母音
ky: > ki:	異化・唇音退化

2.4 音分割と音挿入

宮古島平良下里方言などにみられる *mi: (身) > mi ζ の変化は、はげしい呼気流によって i: の前舌部分が舌尖へとおしやられ、摩擦音 z: に変化したのが、結合する鼻音 m の持続部では鼻腔に呼気流がながれこむために口腔内圧があがらず、持続部の前半部分は摩擦のないアロフォン₁を経て i にもどったが、持続の後半部分は、そのまま z となつてのこつたとかんがえる¹¹⁾。z: が iz に音分割された結果、語末に z が音挿入されたとみることもできる。おなじ変化が mi ζ : mi ζ (新しい), mi ζ muku (新婿), mi ζ zumi (新嫁) でもみられる。

*mi (身) > mi: > m ζ : > mi ζ

宮良當壯 (1930) に [k α s'in'i] (檜・白保), [k α pī] (紙・波照間), [k α ta] (飛蝗・小浜), [ta α r'e:] (鹽・小浜), [p α ra] (柱・小浜, 新城, 波照間) などの無声子音のあとの母音が無声音化と鼻音化している例が多数みられる。いずれもつよい呼気流が後続の母音を無声音化させただけでなく、鼻音化させたことをうかがわせる例である。

おそらく、波照間島方言、白保方言にみられる paN (歯), p α toN (鳩),

naN（縄）、paN（齒）などの語末のN音挿入も [taŋr'e:]（鹽・小浜）とおなじくつよい呼気流によって無声音化と鼻音化がおきたのちに音分割（pa: > pã? > > pãã > pãã > paN）したのではないかとかんがえられる。

3 異 化

南琉球方言には母音の異化も子音の異化もみられる。狭母音化が南琉球方言の代表的な母音の異化である。奥舌狭母音 u の唇歯摩擦音 v への変化や前舌狭母音 i の歯茎摩擦音 z, s への変化もみられる。母音の弱化による音消失も南琉球方言におきた重要な異化で、とくに、宮古諸方言では音韻体系におおきな変更を生じさせている。

無声音化、有声音化、破裂音化、摩擦音化、破擦音化、鼻音化などが子音の異化であるが、南琉球方言全体におきた両唇接近音 w の破裂音 b への変化が子音の異化の代表的な例であろう。与那国島方言の歯茎接近音 j の破裂音 d への変化は、与那国島方言固有の異化であり、大神島方言の有声破裂音の無声音化は、大神島方言に固有の異化である。無声破裂音の有声音化は、八重山諸方言に散在している。与那国島方言では歯茎破擦音の摩擦音化 ts > s と、歯茎摩擦音の破擦音化 s > ts のように、逆向きの異化が同時におきている。

3.1 狭母音化

南琉球方言には *o > u, *e > i の狭母音化がある。いずれも呼気流のつよまりが原因でおきた変化であり、空気力学的な条件が優勢にはたらいだ変化である。*o > u, *e > i は、先行、後続の子音の如何をとわずに前後の音声から相対的に独立して生じている。

3.1.1 奥舌半狭母音*oの狭母音化

声道をながれるつよい呼気によって奥舌半狭母音*oはuになり、もともと存在したuと統合してひとつのフォネームになっている。このとき、*oの円唇性もひきつがれ、唇のまるめはさらにせばまっている。口のひらきの広狭の

変化だけでなく、舌の盛り上がりによる声道のせばめの位置も軟口蓋後部から軟口蓋中央部へと前方におしやられたとかがえられる。

pu: (穂), puni (骨), upuni (大根), kui (声), kubu (瘤), ɬaku (蛸),
jumi (嫁), munu (物), mutu (幹・くもと), kimu (肝), nuɲ (蚤),
nuɲ (鑿), nudu (喉), jadu (戸・くやど), ɬɕnu (角), ɸuɬu (糞),
ɲɬu (味噌), tabuku (煙草), judai (涎), guma (胡麻), agu (顎),
tui (鳥), izu (魚), [多良間村水納島]

utu (音), koi (声), kumi (米), suti (袖), ɲsu (味噌), tura (寅),
turu (泥), pɕtu (人), ɲtu (溝), nunu (布), kɪnu (角), pu: (穂),
jumi (嫁), ju: (夜), iru (色), munu (物), kɪmu (肝), fumu (雲),
ɸfu (糞), [宮古島市大神島]

uja (親), umut'i (表), un (鬼), sugu (底), midu (溝), kudu (去
年), duru (泥), budui (踊り), nunu (布), bunu (斧), mugu (婿),
mumu (腿), duru (夜), dumi (嫁), duku (横), butu (夫), tɕimu
(肝), ɸutɕi (星), [与那国町祖納]

3.1.1 前舌半狭母音 *i の狭母音化

前舌半狭母音 e の前舌狭母音 i への変化も、結合する子音の調音的な特徴の如何にかかわらず語頭、語中、語尾いずれの位置でも起きている。*e>i は、南琉球方言の全体でおきている。南琉球方言の *e>i には、北琉球方言のような i を経た形跡がみられない。*e>i もつよい呼気流によって舌全体とそのもりあがりの最高点が前寄りに移動しているだけでなく、口のひらきの広狭も変化している。

ti: (手), tiɲ (天), koi (声), kumi (米), suti (袖), jumi (嫁), aɸi
(汗), pi: (屁), pira (篋), taki (竹), tiɲ (銭), kati (風), uti (腕),
ɲi: (根), puɲi (骨), mi: (目), mami (豆), ami (雨), jumi (嫁),

kaki (影), napi (鍋), [宮古島市大神島]

mi: (目), ami (雨), kami (亀), jumi (嫁), tsmi (爪), nabi (鍋),
ibi (海老), kui (声), pai (蠅), pigi (髭), pagi (禿), mai (前), ui
(上), ti: (手), pi: (屁), ji: (根), puji (骨), aſi (汗), kin (蹴爪・
<けん), taki (竹), [多良間村水納島]

ti: (手), tin (天), udi (腕), sudi (袖), ji: (根), ji: (子), ɸuji
(骨), ubuji (大根), mi: (目), dumi (嫁), dubi (昨夜), kui (声),
mai (前), ki: (毛), tagi (竹), sagi (酒), hi: (屁), hira (へら),
kadi (風), din (銭), [与那国町祖納]

3.1.2 前舌狭母音 i の摩擦音化

宮古諸方言では *i の異化 (摩擦音化) がおきている。下里方言の *i > ʒ は、
子音と結合せず単独であらわれるとき、および、b, g と結合するときのみら
れる異化で、p, k と結合するときには、*i > ʃ がみられる。

*i から変化した ʒ, ʃ を音韻論的にどう解釈するかは別としても、*iwo (魚)
> *ʒwu > ʒzu, *tabiwa (旅は) > tabʒza, *mugiwa (麦は) > mugʒza のよう
に、後続の w を ʒ に摩擦音化させ、*tsukijo (月夜) > tʃkʃʃu, *pira (平) >
pʃsa のように後続の j, r を s に摩擦音化させていることから、前舌狭母音 *i
が摩擦音化したことは確実であろう。k, p と結合する ʒ が ʃ であられるの
は、進行部分同化によって k, p の無声性が付与された結果である。

ただし、単独で、あるいは語末にあらわれる ʒ の摩擦はよわくなっていて、
有声の歯茎接近音的にあらわれるし、単独で語末にあらわれるものは、弱化し
てほとんどうしなわれる場合もある。摩擦のよわまった歯茎接近音的な音節主
音を ɿ と表記する。

3.1.3 奥舌円唇母音 u の摩擦音化

おおくの宮古諸方言では *ura > vva (おまえ), vvi (売れ), vvan (売らな

い) にみるように、語頭の *u は、つよい呼気流に対抗する唇歯のふんばりによって有声の唇歯摩擦音 γ に変化している。この異化は、後述する両唇接近音の両唇破裂音への異化 *w>b と平行する音韻変化であろう。

*k, *p, *g, *b と結合する *u も γ に変化するが、そのとき、結合する子音との同化がおきている。4.2.2 相互・部分同化, 4.2.3 逆行・完全同化の項を参照。

3.2 破裂音化

南琉球方言の異化による破裂音化には両唇接近音の両唇破裂音への異化 *w>b と、歯茎接近音の歯茎破裂音への異化 *j>d がある。*w>b は、南琉球方言全域に規則的にみられるが、*j>d は与那国島方言に固有の変化である。そのほかに、歯茎摩擦音の歯茎破裂音への異化 *ts>t, *dz>d がみられる。

3.2.1 両唇接近音 w の破裂音化

南琉球方言では *w>b の変化がおきているが、両唇接近音 w の調音的な特質は奥舌狭母音 u と共通で、u が後続する母音と結合して音節をひらく位置にたち、音節副音として子音として機能しているとみることができる。w の空気力学的な特徴も u とおなじとみることができる。すなわち、u と w は声道がせまく、音響管としての効率のわるさから、広母音とおなじ程度のきこえを保証するためには、よりつよめの呼気をもって発音されなければならない。もし、つよい呼気の特徴とする南琉球方言にあって、せまい声道をつよい呼気にながれ、両唇で調音される w がつよい呼気に対抗する唇の「ふんばり」によって緊張が増して摩擦がつよくなれば、接近音 w から摩擦音 β をへて、破裂音 b に変化したとかがえられるのである。

bara (藁), bata (腹), bana (罌), ba₁ (割る), butu (夫), buba (おば), bu:nu (斧), bututu₁ (一昨日), buduz (踊), bu:gʒ (甘蔗・荻に対応), bju:1 (酔う), bz: (亥), bʒʒi (坐れ), bo: (童名・王^{わう}に対応), bigu₁ (えぐる), [宮古島市平良下里]

bara (藁), bata (腹), baɣɪ (脇), bagamunu (若者), barasa:ŋ (悪い), ba:ro:ŋ (笑う), tʃaban (茶碗), budu (夫), bu: (苧・緒), bu:nu (斧), buba (おば), bunarɪ (をなり), bɪ: (亥), bɪrun (坐る), bi:ŋ (酔う), [石垣市石垣]

語頭の *w は破裂音化して b に変化しているが、いくつかの例外をのぞいて語中での *w > b はみられない。古代日本語の語中の *w は、現代語では a と結合する *-w- をのぞいてうしわれているが、南琉球方言をふくむ琉球方言全体で語中の *-w- を失っている。琉球方言のばあい、a と結合する -w- も消失している。

a: (泡), ta:ra (俵), ai (藍), nai (地震), so: (竿), o: (青), mju:tu (夫婦), [宮古島市平良下里]

日本語では語中母音間の *-p- が ϕ を経て、-w- に変化した（いわゆる八行転呼音）が、その -w- もワ行子音の w と統合され、やはり、a と結合するばあいをのぞき、現代語では消えている。琉球方言でも、同様の変化 (*-p- > ϕ > -w-) が起こったとみられ、ワ行子音の w とおなじく語中の -p- のほとんどが音消失している。南琉球方言の *w > b の変化は、語中 w の消失のあとにひきおこされたあたらしい変化であるとかんがえられる。

3.2.2 歯茎接近音 j の破裂音化

与那国島方言では、歯茎接近音 *j が破裂音化して d であらわれる。*j > d は、*w > b とはことなり、与那国島方言でしかおきていないし、しかも、語中の j は破裂音化していない。与那国方言でも他の南琉球方言とおなじように呼気がつよまった時期があり、そのとき、*i の摩擦音化と並行して、歯茎接近音 *j が摩擦音化して ʒ になったとかんがえる。有声の歯茎摩擦音 ʒ と歯茎破擦音 dʒ の音韻的対立のない方言にあって、語頭の歯茎摩擦音は歯茎破擦音と統合されたのであろう。与那国島方言は、後述するように歯茎破擦音 dʒ の破裂音 d への異化がおきていて、それと並行して、j から摩擦音（破擦音）化した ʒ

(d₃) も破裂音化したのであろう。

da: (家), dama (山), damuŋ (痛む), damat'u (大和), dumi (嫁),
duru (夜), duda (枝), duga (四日), dudai (涎), dutti (斧・ヨキ),
duguŋ (憩う), du: (湯), dumuŋ (読む・数える), dwai (祝い), dakkaŋ
(葉缶), hadasai (葉野菜)

しかし、複合語の後要素をのぞく、語中の j は d に変化していない。*d₃の破裂音化は語中でもおきているので、語中の j は摩擦音化しなかったのである。

uja (親), maju (眉), ujubi (指), iju (魚), ujantu (鼠), aja (蟻),
kubuja (蝙蝠), dudaja (ナメクジ), guja (苦瓜), ma:ju (猫), tɕiju
(露),

3.2.3 歯茎摩擦音 ts の破裂音化

南琉球方言には無声の歯茎摩擦音 *ts の破裂音 t への異化と、有声の歯茎摩擦音 *dz の破裂音 d への異化がみられる。この破裂音化に地域的なまとまりはなく、散在してみられる。有声の歯茎摩擦音 *dz の破裂音化 *dz > d が与那国島方言、宮古島市城辺保良方言、大神島方言でみられる。

du: (門), du: (尾), kudu (去年), karabada (軽業), midu (溝),
kada (匂い), kadaN (蚊), sudi (障子), [与那国町祖納]

dau (門), du: (尾), kudu (去年), kada (匂い), budasa (叔父),
ada (兄), suda (年上), gadam (蚊), [宮古島市城辺保良]

tiŋ (銭), kati (風), tau (門), mtu (溝), puta (おじ), [宮古島市大神島]

無声の歯茎摩擦音の破裂音化 *ts > t は、与那国島方言、宮古島市城辺保良方言、大神島方言でみられる。

itigu (従兄弟), [与那国町祖納]

tapaŋ (茶碗), [宮古島市大神島]

3.3 無声音化

大神島方言の無声音化は、語頭、語中、語尾のいずれの位置においても、前後に配置されるフォネームの韻質を問わずにおきた異化である。大神島方言の有声破裂音 b, d, g はすべて無声破裂音 p, t, k に変化し、もともと存在した無声破裂音 p, t, k とフォネームの統合がおき、フォネームの数が減少すると同時に、破裂音において有声／無声の音韻的対立がなくなるという音韻体系のおおきな再編をもたらしている。

turu (泥), tuku (毒), taʋ (道具), kati (風), pɪtaɪ (左), uti (腕), nata (涙), katu (角), suti (袖), juta (枝), tau (門), pataka (裸), tita (太陽), pasa (芭蕉), paʋ (棒), napi (鍋), ipɪ (海老), pupa (叔母), nipan (二番), pata (腹¹²⁾), tapaŋ (茶碗), putu (夫), pupa (おば), pɪri (坐れ), putuɪ (踊り), kaki (影), kakaŋ (鏡), napi (鍋), kʋkapi (黄金), pɪki (髭), mɪkɪ (右), fukɪ (釘)

大神島方言の舌先母音 ɪ は呼気がよわく摩擦もほとんどない。唇歯摩擦音 v も摩擦がよわくなり唇歯の接近音 ʋ であらわれるなど、呼気流のよわまりが観察される。大神島方言の無声音化は、呼気流のよわまりによって声門下圧が相対的にさがり、声道内との声門下圧の差がちぢまって声帯の力強い振動がえられなくなって無声音化したのではないかとかんがえる¹³⁾。

3.4 有声音化

波照間島方言、与那国島方言をはじめとする八重山諸方言には、語中の無声破裂音 k の有声破裂音 g への変化 *k>g がみられる。前後の母音の有声性による同化とみることも可能だが、とくに与那国島方言では語中の有声破裂音 g の軟口蓋鼻音 ŋ への変化があつて、これと連動する発生拘束¹⁴⁾による変化であり、前後の母音の同化という単純な変化ではないだろう。

iga (烏賊), aga (赤), agarı (灯り), bagaskı (三日月・若月), nuga (糠), naga (中), junaga (夜中), ni:ga (今夜・遅く), mugası (昔), mi:ga (三日), ju:ga (四日), de:guŋi (大根), rugugwaŋi (六月), iragi (鱗), Je:gu (大工・細工), sogi (箆), jagimunu (焼物), [竹富町波照間島]

aga (赤), bagatsiki (新月・若月), hagai (秤), hagama (袴), kagaŋ (下裳), hagama (羽釜), aga (垢), su:gi (箆), tagi (竹), sagi (酒), mugu (婿), itigu (従兄弟), agubi (あくび), magura (枕), kagudi (顎), [与那国町祖納]

3.5 摩擦音化

南琉球方言の異化による摩擦音化には破裂音の摩擦音化 $*p > h$, $*k > h$, 破裂音の摩擦音化 $*ts > s$, および先述した前舌狭母音 $*i$, 奥舌狭母音 $*u$ の摩擦音化がある。

3.5.1 両唇破裂音の声門摩擦音化

南琉球方言における両唇破裂音 p の声門摩擦音 h への変化は、池間島方言、与那国島方言、石垣島四箇方言が知られる。類似の変化が北琉球方言でも見られるが、北琉球方言では $*p > \phi > h$ のように、 h に変化するまえに、両唇摩擦音 ϕ を経ているのに対して、南琉球方言では ϕ を経た形跡がみられない。

ha: (齒), hai (針), hagai (秤), haŋi (羽), hagama (羽釜), hagama (袴), [与那国町祖納]

3.5.2 奥舌軟口蓋破裂音の声門摩擦音化

軟口蓋破裂音 $*k$ の声門摩擦音 h への変化は、黒島方言の $*ka > ha$ が代表的なものである。他の方言でも若干みることではできるとはできるが、まとまっておらず、個別的である。北琉球方言の沖永良部島方言、与論島方言、沖縄島北部方言で $*a$, $*e$, $*o$ と結合した $*k$ の h への変化がみられるが、黒島方言では $*a$

と結合した *k だけが摩擦音化している。

h̥ata (肩), h̥ami (亀), h̥abi (紙), padaha (裸), harata (身体), haŋ
(カニ), hauʒi (麴), haza (蔓), haʒi (風), haŋgaŋ (鏡), [竹富町黒
島東筋]

3.5.3 歯茎破擦音の摩擦音化

無声の後部歯茎・破擦音 tʃ の無声の後部歯茎・摩擦音 ʃ への変化が黒島方言、与那国島方言などにみられる。

ʃiʃkinu munu (月経), ʃi: (血), ʃiʃra (顔, 頬), ʃiʃki (月), ʃibi (尻)
[竹富町黒島東筋]

3.6 鼻音化

南琉球方言の異化による鼻音化には破裂音の鼻音化 *g>ŋ, *gi>N, *ge>ni, *d>n がある。

*g>ŋ

奥舌軟口蓋破裂音の鼻音化 *g>ŋ は与那国島方言でみられる。

aŋai (東), kuŋaŋi (黄金), aŋi (陸), ta:ŋu (担桶), duŋabu (世果報),
danəŋuti (悪口), [与那国町祖納]

*gi>N

波照間島方言でも白保方言でも *i と結合した *g は鼻音化 (*gi>*ŋi) し、さらに母音 i が音消失して撥音 N に変化している。*gi>*ŋi は、先行音節に無声子音 p, k があってもおきていて、無声音化に先行しているし、語末の母音 i の音消失のまえに鼻音化が先行している。*ŋi>N は、*mi>N と平行的におきた語末の音消失であろう。

φuN (釘), muN (麦), paN (足はぎ), φukoN (フクギ), [石垣市白保]

*ge>ni

髭 (ひげ) の語形をみると、軟口蓋破裂音 g の鼻音 n への変化がさきにあっ

て、そののちに語頭の無声子音 p の進行同化による鼻音の無声音化がおきたことがわかる。無声音化がさきにおきていれば、piki のような語形ができ、もともとあった k と統合すると、鼻音化・有声音化しにくかったとかがえられるからである。

p^smi^{ひげ} (髭) 白保, pi^{ひげ}ni (髭), [竹富町波照間島]

*d>n

波照間島方言の ſiŋa (太陽), pi^ひnari (左), ts^すŋiN (孵でる) の語例では有声破裂音 *d の鼻音 n への変化がみられる。*d>n が先行し、のちに n が無声音化したとかがえる。*g>n は波照間島方言、白保方言でおきているが、*d>n は波照間島方言でしかみられない。

ſiŋa (太陽), pi^ひnari (左), ts^すŋiN (孵でる), [竹富町波照間島]

*g と *d は先行音節の母音が前舌狭母音 i, あるいは、奥舌狭母音 u のときに鼻音化している。全体として鼻音化の現象をしめす語例がすくないので断定はできないが、狭母音 i, u のせまい声道をながれるつよい呼気流が鼻音化の要因ではないかとおもわれる。波照間島方言、白保方言のおおくの音韻変化の要因になっているつよい呼気流の空気力学的な力が発生拘束となって、鼻音化もひきおこしたのではないだろうか。

鼻音化の要因の再検討は今後の重要な課題である。

4 同 化

母音と母音のあいだでおきる同化には隣接同化も遠隔同化もみられる。遠隔同化とはいっても、母音のばあい子音の持続部においてすでに結合する母音の口がまえがとられていて、先行音節の母音と後続音節の母音は、相互に影響をあたえあう条件があるといえる。文字上はへだたっているようにみえても、じっさいには隣接同化にひとしいとかがえてよいだろう。

子音と子音のあいだでおきる同化には、これまで調査した範囲で隣接同化に

よる子音変化はあるが、遠隔同化による子音変化はみられなかった。開音節の CV 構造を基本とする琉球方言にあって、子音と子音のあいだには母音をはさまるので、母音を介してへだたった子音同士が子音としての調音上の特徴を付与することはないとかがえる。子音と子音のあいだの同化には、母音の音消失によって子音が隣接しておきた隣接同化か、先行音節の無声性が母音を仲介しておきる無声音化などにかぎられる。後者のばあい、無声化母音の隣接進行同化とかがえる。

南琉球方言にみられる隣接同化には進行同化、逆行同化、相互同化がある。遠隔同化¹⁵⁾には進行同化、逆行同化がみられる。

4.1 母音の同化

母音の隣接同化には、相互同化による母音連続の音融合がみられる。遠隔同化には逆行同化による狭母音化、広母音化と、進行同化による狭母音化、広母音化とがある。隣接同化は部分同化の例がみられ、遠隔同化は完全同化の例がみられた。

名詞に対比強調のとりたて助辞 wa¹⁶⁾ が後接した文法的な形式でも名詞末尾の母音と助辞の頭子音との相互同化がみられる。八重山諸方言と宮古諸方言では同化のしかたがことなる。

4.1.1 隣接相互同化

南琉球方言でも北琉球方言と同じく二重母音の隣接相互同化とそれともなう音融合がおきている。しかし、南琉球方言のなかには二重母音の相互同化のみられない下位方言がある。*ao>o:, *ae>e:, *ai>e:, *eu>u: などの同化は、祖形を日本祖語の *awo, *awe, *awi, *api, *ape, *epe とみると、*awi, *awe, *awo では語中接近音 w の音消失が先行し、*api, *ape, *epu では語中両唇破裂音 p の摩擦音化、有声音化 w, 音消失が先行していたとみられる。

*au の相互同化

八重山諸方言で *au>o: の相互部分同化がみられる。a の広母音性と u の奥

舌円唇性と狭母音性が相互に影響をあたえあった部分相互同化で、長母音o:に音融合 (au>o:) している。宮古諸方言でも同様の相互同化が見られるが、宮古島市城辺保良方言では *au は同化せず、au のままあらわれる¹⁷⁾。

ko:dzɪ (麴), bo: (棒), gumbo: (牛蒡), po:tsɪ (箒) [石垣市白保]

*ao の相互同化

*au>o: とおなじように、*ao>o: の相互同化がみられる。宮古諸方言のばあい語末に a をもつ名詞に対格の格助辞 *wo の後接した形式もふくまれる。このとき、*ao からすぐに o: に変化したのか、いったん *au の段階を経たあとに o: に変化したのか不明である。

so: (竿), o:batu (青鳩) [竹富町波照間島]

pano: (花を), kaso: (笠を), tako: (鷹を), kato: (肩を), fso: (草を) [宮古島市平良下里]

*ai の相互同化

八重山諸方言で *ai>e: の相互部分同化がみられる。a の広母音性と i の前舌性と狭母音性が相互に影響をあたえあった部分相互同化で、長母音 e: に音融合 (ai>e:) している。宮古諸方言では同様の同化が見られず、ai のままあらわれる。

n₁e: (地震), p₁e: (灰), t₁a₁e (鹽), m₁e: (米) 白保 [石垣市白保]

八重山諸方言のなかでも黒島方言や与那国島方言でも ai のままあらわれる。

ai (藍), mai (米, 稲), mai (前), nai (地震), pai (灰), pai (鋏),
[竹富町黒島東筋]

*ae の相互同化

p₁e: (蠅), p₁e: (南), m₁e: (前), n₁e: (苗) [石垣市白保]

*eu の相互同化

大神島方言の ky:, 沖永良部島国頭方言の hy: などから, *keu>ky:>kju:, *keu>hy:>ɸju: の変化の過程で相互同化と音分割 cleaving のあったことがわかる。宮古島市平良下里方言の kju: (今日) は, 相互同化による音融合とその後の音分割によって生成された語形である。詳細は先に述べたとおりである。

下里方言などの宮古諸方言では語末に *e を有する名詞に格助辞 wo が後接するとき, 相互同化による音融合 *-ewo>-iu>-ju: がおきている。*e は狭母音化して i に変化したのち, 結合する子音を口蓋音化させて消失している。

mamewo (豆を) >mamiu>mimju:

sakewo (酒を) >sakiu>sakju:

*ua の相互 同化

竹富島, 鳩間島, 石垣島四箇方言で *uwa が o: に変化した語形がみられる。語頭の円唇奥舌狭母音 u と, 第2音節目の広母音 a が相互同化して o: が生成されたものとかがえる。u¹⁸⁾ と広母音 a の相互同化で興味ぶかいのは, 黒島東筋方言の wa (豚) である。wa (豚) の a は, 奥舌広母音である。黒島東筋方言の wa は, *ua の u が音消失していく過程で, u の進行同化によって, *ua>a がおきたことを示唆するものである。

o:spa (上唇), o:nai (嫉妬) [竹富町竹富島]

o:dzɪrɪ (上汁), o:fiki (天気) [竹富町波照間島]

下里方言をはじめとする宮古島の諸方言, 石垣島四箇などの八重山の諸方言で語末に *u, *o を有する名詞にとりたて助辞 wa が後接するときにも相互同化による音融合 *-uwa>-ua>-o:, *-owa>-uwa>-ua>-o: がおきている¹⁹⁾。

mukowa (婿は) >mukua>muko:

majuwa (眉は) >majua>majo:

宮古島市城辺保良方言のばあい, *o は狭母音化して u に変化したのち, 結合する子音を唇音化させて消失している。

mukowa (婿は) >mukua>mukwa:

nunowa (布は) >nunua>nun^wa:

石垣島四箇などの八重山諸方言では、語末に *e を有する名詞にとりたて助辞 wa が後接するとき、相互同化による音融合 *-ewa>-iwa>-ia>-e: がおきている。

mamewa (豆は) >mamia> mame:

sakewa (酒は) >sakia>sake:

石垣島四箇方言では、語末に *i を有する名詞にとりたて助辞 wa が後接するとき、相互同化による音融合 *-iwa>-ia>-e: がおきている。

muʃi · wa (虫は) >musia>muse:

motʃi · wa (餅は) >mutsia>mutse:

todʒi · wa (妻は) >todzia>tudze:

tori · wa (鳥は) >turia>turɛ:

下里方言などの宮古諸方言では、語末に *e を有する名詞にとりたて助辞 wa が後接するとき、同化による音融合 *-ewa>-ia>-ja: がおきている。*e は狭母音化して i に変化したのちに、結合する子音を口蓋音化させて消失している。

mamiwa (豆は) >mamia>mamja:

sakewa (酒は) >sakia>sakja:

宮古諸方言には対格の格助辞 wo が長母音や二重母音のうしろにくると、膠着的な ju であらわれるが、語末に *e を有する名詞に格助辞 wo が後接するとき、相互同化による音融合 *-ewo>-iu>-ju: がおきている。*e は狭母音化して i に変化したのち、結合する子音を口蓋音化させて消失している。

mamewo (豆を) >mamiu>mimju:

sakewo (酒を) >sakiu>sakju:

宮古諸方言では語末に *o を有する名詞に格助辞 wo が後接するとき、相互同化による音融合 *-owo>-uu>-u: がおきている。

mukowo (婿を) >mukuu>muku:

nunowo (布を) >nunuu>nunu:

宮古島市平良下里方言、同西里方言をはじめとする宮古島中央部の諸方言では語末に *a を有する名詞に格助辞 wo が後接するとき、相互同化による音融合 *-awo>-au>-o: がおきている。しかし、宮古島市城辺保良方言などの周辺部の方言では相互同化・融合せず、panau (鼻を), pakau (墓を), ujau (親を) などのように、au のままあらわれる。

panawo (鼻を) >panau>pano:

pakawo (墓を) >pakau>pako:

4.1.2 遠隔進行同化

母音の遠隔同化には進行同化、逆行同化がある。隣接同化にくらべて、遠隔同化は個別的、単発的であり、語例もすくなく、遠隔同化のおきる条件のとりだしができていない。波照間島方言、白保方言の遠隔進行同化には、後続音節の母音 u によるもの、母音 i によるもののふたつがある。

u の同化

波照間島方言では *si>s₁, *ri>r₁ の変化がみられるが、p_usu (星), juru (夜), 白保方言の p_usu (星), uruN (瓜), juru (夜) では先行音節の母音 u の影響をうけて後続音節の母音 ₁ が u に変化している。

i の同化

波照間島方言、白保方言で *tʃi>ts₁, *tsu>ts₁, *ki>ts₁ の変化がみられるが、波照間島方言の mitʃi (道), iʃ_iɱpus₁ (動物・いきむし), 白保方言の mitʃi (道), k_itʃiri (煙管) では先行音節の母音 i の影響をうけて後続音節の母音 ₁ が u に変化している。

4.1.3 遠隔逆行同化

波照間島方言、白保方言の遠隔逆行同化には、後続音節の母音 a によるもの、母音 u によるもの、母音 i によるもののみつつがある。

波照間島方言 p^s_iŋakaN（火の神）、白保方言 piŋakaN（火の神）では後続母音 a の影響で先行母音 u が a に変化している。

*tsu>s_i, *ki>s_i の変化がおおくの語例でみられるが、白保方言の s_upu（壺）、s_uru（腱）、s_umu（肝）では後続音節の母音 u の影響をうけて先行音節の母音 ɪ が u に変化している。

波照間島方言、白保方言では *tsu>s_i, *su>s_i の変化がみられるが、ʃ_imi（爪）、ʃ_ipi（尻）、ʃ_iŋi 脛では後続音節の母音 i の影響をうけて先行音節の母音 ɪ が i に変化している。piŋi（髭）は、*pi>p_i の変化ののちに後続母音 i の影響で i に変化している。

*pige>piŋi は、母音の異化、有声破裂音の鼻音化、鼻音の無声音化、母音の遠隔逆行同化などの音韻変化によってできた語形である。

*pige>pigi 母音の異化・前舌狭母音の舌先母音化（あるいは摩擦音化）

pigi>pɪŋi 有声破裂音の奥舌軟口蓋鼻音化

pɪŋi>piŋi 遠隔逆行同化による母音変化と鼻音の調音点の移動

4.2 子音の同化

南琉球方言の同化による子音変化はすべて隣接同化である。同化の方向と程度のちがいによる完全進行同化、部分進行同化、部分相互同化がみられる。付与される韻質によって無声音化、摩擦音化、破裂音化、有声音化などがある。

4.2.1 部分進行同化

部分進行同化には、無声音化がある。破裂音、摩擦音の無声音化と鼻音、流音の無声音化があるが、両者は性質がことなる。南琉球方言で有声破裂音の無声音化（*b>p, *d>t）が顕著にみられるのは波照間島方言、白保方言である。無声音化は、先行音節に無声子音をふくむばあいにかざられ、つよい呼吸流によって後続音節の有声子音が無声子音に変化するものである。波照間島方

言、白保方言の話者は、発話に際して、腹筋を収縮させるのが服の上から観察できるほど激しい呼気流を発して無声音化させている。声門の状態を有声音から無声音に変化させて無声性だけを付与する部分進行同化である。

*b, *d から無声音化した p, t は、以前から存在した p, t と統合し、呼気流がよわまっても、先行音節の母音が無声音化しなくても安定して p, t であらわれる。フォネームとしては /pata/ (肌) のようにあらわれて遠隔同化のようにみえるが、後述する鼻音、流音の無声音化からわかるように、無声音化には先行音節の母音の無声音化も義務的にあったと考える。歴史的には先行音節の無声子音による遠隔同化ではなく、先行音節の子音に端を発し、母音の無声音化を介した隣接進行同化である。

*b > p

sapa (草履^{きば}), spa (唇^{すば}), tapagu (煙草) supu (壺), kapi (紙)
kipus_ɿ (煙) [石垣市白保]

*d > t

ſita (太陽^{てだ}), pitari (左) ſitari (すだれ) pata (肌) [石垣市白保]

*d₃ > tʃ

ka_ɕti (風), ka_ɕs_ɿ (舵^{かぢ}), ku_ɕs_ɿN (去年), ki_ɕs_ɿ (傷),
ɸtʃi ~ ɸu_ɕtʃi (筆) [石垣市白保]

語頭、および、先行音節に無声子音をふくまない音環境にある有声音は、無声音化しておらず、すべての有声音 b, d が無声音化したわけではない。波照間島方言、白保方言には無声音化しない b, d も存在するので、破裂音、破擦音に有声／無声の音韻的対立がうしなわれたわけでもない。

basa: (芭蕉), aba (油), duru (泥), juda (枝) [石垣市白保]

先行音節に無声子音があって、しかも呼気流がつよく先行音節の母音も無声音化したばあいにかぎって、語中の有声の鼻音 m, n, 流音 r が無声音化して m̥, n̥, r̥ であらわれることがある。しかし、m̥, n̥, r̥ は、呼気流のよわい発話

においては容易に有聲子音で実現される不安定なアロフォンであり、呼気流がよくなると、本来の有聲音であられる。m̥, n̥, ɾ̥ は、呼気流がつよい環境であられるアロフォンである。

*m > m̥

pḁma (浜), şma (島), su̥mu (肝), φumoN (雲), ſi̥mi (爪),
kḁmi (亀) [石垣市白保]

*n > n̥

pḁna (花), s̥na (綱), si̥nu (昨日), ſi̥no (角), pu̥ni (骨), φu̥ni (船),
kḁni (金属), tḁni (種), pḁni (羽), ſi̥ni (脛) [石垣市白保]

*r > ɾ̥

pḁra (柱), tḁre (盥たらい), pi̥ru (昼), ş̥ra (頬), ku̥ra (倉)
pḁrɪ (針) [竹富町波照間島]

4.2.2 部分相互同化

宮古諸方言で *u が *k, *p と結合するとき、隣接完全相互同化がおきて摩擦音 f が生成される²⁰⁾。*k, *p と *u の相互同化のまえに *u の異化・摩擦音化が先行している。

宮古諸方言において *u から変化した v は結合する *k, *p を唇歯摩擦音に変化させるが、いっぽうで、k は、結合する v を無聲音化させている。*v が *k, *p の調音方法と調音位置を変えた隣接部分逆行同化と、*k, *p が v の声門の状態を変えて無聲音化させる部分進行同化とが同時におきて、両者がまったくおなじ音韻の特徴をもつようになって音融合している。隣接部分相互同化による音融合で成節的な f になっている。

*kusa (草) > k̥y̥sa > f̥sa,

*ikusa (戦) > i̥k̥y̥sa > i̥f̥sa

*jaku (厄) > jḁk̥v̥ > jḁf̥

*pune (舟) > pu̥ni > f̥ni

石垣島四箇方言²¹⁾の jahu [jḁφu̥] (厄), huda [φuda] (札) などでは *ku > φu,

*pu>φu の音韻変化がおきたようにみえる。しかし、八重山諸方言の *ku, *pu でも宮古諸方言の *ku>f, *pu>f と平行して、*ku>ky>f>φ の変化がおきたとかがえる。しかし、成節的な子音を発達させた宮古諸方言とはことなり、開音節の CV 構造を基本とする八重山諸方言にあつて、f に母音 u の挿入と両唇摩擦音への変化があつて φu あるいは φu になったとかがえる。母音 u の挿入は音節構造に制約されておきる現象である。なお、加治工真市 (1984) には波照間島方言と黒島方言の *ku が唇歯摩擦音 f であったことを記述している。くわしくは加治工 (1984) を参照。

*kugi (釘) >kygi>fŋi>fuN>φuN

*puju (冬) >pyju>fju>fuju>φuju

φumoN (雲), φutŋi (口), φutŋi (櫛), φuN (釘), φutsu (糞), φutsa (草)

φutŋi (筆), φutsŋk'a (二日), φtari (二人), φuku (肺), φuju (冬)

[石垣市白保]

4.2.3 完全逆行同化

宮古諸方言の *gu, *bu の *u は、摩擦音 v に変化したのち、結合する g, b の調音点を両唇から唇歯へ移動させると同時に、調音方法を破裂音から摩擦音へと変更させ、唇歯音に完全逆行同化させて音融合をおこし、成節的な v を生成させている。

*daugu (道具) >daugv>dauv>do:v

*janagutŋi (悪口) >janagvtŋs>janavtŋs

*kobu (昆布) >*kubv>kuv

*pabu (へび) >*pabv>pav

宮古諸方言の *b, *g, *p, *k と結合する *i は摩擦音化して音節主音的な z, ʃ になるが、*dʒ, *tʃ, *ʃ と結合する *i でもおきている。*i>z の過程で音節主音的な z, ʃ は結合する後部歯茎破裂音 *dʒ, *tʃ, *ʃ の調音点を移動させて歯茎摩擦音 dz, ts, ʃ に逆行同化させて音融合し、成節的な dz, ts, ʃ にしている。成節的な dz, ts は後続の r, w, j を破裂音化させ、成節的な ʃ は後続

の r, w, j を摩擦音化させる。

*patʃi (蜂) > *patʃs > patʃ

*todʒi (妻) > *tudʒz > tudz

*muʃi (虫) > *muʃs > muʃ

*ki, *gi に対応して kʃ, gʒ があらわれる宮古諸方言にあって保良方言では ts, dz があらわれる。音節主音的な ʃ, ʒ が結合する子音 k, g の調音点を歯茎音へと移動させて歯茎破擦音にかえた逆行同化の例である。奥舌軟口蓋破裂音の歯茎破擦音化と音融合がおきて、成節的な tʃ, dʒ が生成されている。

*iki (息) > *ikʃ > itʃ

*mugi (麦) > *mugʒ > mudz

4.2.4 完全進行同化

宮古諸方言では様々な音韻変化によって生成された成節的な m, n, f, v, ʎ が後続する r, j, w を進行同化によって鼻音化、摩擦音化、そり舌音化させている²²⁾。また、末尾に成節的な m, n, f, v, ʎ を有する名詞に後接するとりたて助辞 wa, 格助辞 wo の頭子音 w を進行同化によって鼻音化、摩擦音化、そり舌音化させている。この完全進行同化は、宮古諸方言に特徴的なもので、成節的な子音の発達しなかった八重山諸方言にはみられないものである。

*ura > vva

宮古諸方言では *ura > vva (おまえ), vvi (売れ), vvan (売らない) の語形にみるように、*u から唇歯摩擦音化した成節的な v は、後続の *r を完全同化させて唇歯摩擦音 v に変化させている。

*ura (君) > vra > vva

*ure (売れ) > vri > vvi

*uranu (売らない) > vran > vvan

宮古諸方言の *gu, *bu から生成された成節的な v を語末に有する名詞にとりたて助辞 wa, 格助辞 wo が後接するとき、成節的な v は助辞の頭子音 w を

完全同化させて摩擦音 *v* にかえている。*bura の音連続でもおなじ変化がおきている。

*kobuwa (昆布は) > kuy · wa > kuyva

*dauguwa (道具は) > dauy · wa > dauyva > do:yva

*abura (油) > ayra > ayva

宮古諸方言の *ku, *pu から生成された成節的な *f* を語末に有する名詞にとりたて助辞 wa, 格助辞 wo が後接するとき、成節的な *f* は助辞の頭子音 w を完全同化させて摩擦音 *f* にかえている。*kura, *pura の音連続でもおなじ変化がおきている。

*jakuwa (厄は) > jaf · wa > jaffa

*taupuwa (豆腐は) > tauf · wa > tauffa > to:ffa

*makura (枕) > mafra > maffa

*puranu (降らない) > franu > ffan

波照間島方言、白保方言、石垣島四箇方言においても、*ku, *pu に後続する位置の *r, j が摩擦音化して無声の両唇摩擦音 *ɸ に変化している。これら方言においても完全進行同化による r, j の摩擦音化のあったことがわかる²³⁾。そこでは *ku, *pu に母音 u の唇歯摩擦音化と ky, py の相互同化による音融合、唇歯摩擦音 *f* の両唇摩擦音化、進行同化による r, j の摩擦音化がおきている。波照間島方言の ɸɸa (倉), ɸɸu (黒), maɸɸa (枕), ɸɸi (冬) がそのような変化の結果できた語形である。

*kura (倉) > kyra > fra > ffa > ɸɸa

南琉球方言には *i に後続する r, j, w の摩擦音化, *u に後続する r の摩擦音化がみられるが、いずれも先行音節の母音 *i, *u の異化 (摩擦音化) が義務的である。

異化によって前舌狭母音 i から有声・歯茎摩擦音に変化した *z* が後続の両唇接近音 w を完全進行同化によって *w > z の音韻変化を引きおこしている。こ

の変化は語末に *i をもつ単語に格助辞 wo, とりたて助辞 wa の後接した形式でもおきている。石垣島四箇方言の idzu (魚) は、呼気流のよわまりによって語頭の z が i にもどり、有声・歯茎摩擦音 z が破擦音 dz に変化した語形である。

- *iwo (魚) > *z̥wu > z̥zu > idzu
- *mi:jome (新嫁) > *m̥z̥:jumi > mi̥z̥jumi
- *tabi · wo (旅を) > *tab̥z̥wu > tab̥z̥zu
- *mugi · wa (麦は) > *mug̥z̥wa > mug̥z̥za
- *tori · wo (鳥を) > *tu̥z̥wu > tu̥z̥zu

*-ir-, *-iw-に無声子音 k, p が先行するとき、進行同化によって先行子音の無声性が付与されて、無声の歯茎摩擦音化 *-iw->-ss-, *-ir->-ss- がおきている。つよい呼気流によって *i が摩擦音 z̥ に変化したあと、先行する無声破裂音の進行同化によって無声摩擦音化し、さらに後続の w, r を無声の歯茎摩擦音 s̥ に完全進行同化させている。*i に後続する子音が後部歯茎接近音 j のとき、先行する s̥ の無声性と摩擦音性は付与されるが、口蓋音性は維持されたままで、後部歯茎摩擦音 ʃ であらわれる。宮古島市上野野原方言や宮古島市城辺保良方言では、ʃ の逆行同化によって、i から変化した s̥ が ʃ であらわれる。

- *piranu (放らない) > *p̥ʃran > p̥ssan
- *kiranu (切らない) > *k̥ʃranu > k̥ssan
- *saki · wo (先を) > *sak̥ʃwu > sak̥ʃsu
- *asubi · wa (遊びは) > *as̥b̥z̥wa > ḁʃp̥ssa
- *pire (放れ) > *p̥ʃri > p̥ʃ̥i > p̥ʃ̥i
- *kire (切れ) > *k̥ʃri > *k̥ʃ̥i > k̥ʃ̥i > k̥ʃ̥i
- *tsukijo (月夜) > *t̥ʃk̥ʃju > t̥ʃk̥ʃ̥u

*swa > ssa

宮古諸方言の *si, *su は、語末音消失によって成節的な s̥ になる。語末に成節的な s̥ を有する名詞にとりたて助辞 wa, 格助辞 wo が後接するとき、助

辞の頭子音 w を完全同化させて摩擦音にかえている。

*uʃiwa (牛は) >uʃi · wa>uʃʷwa>uʃsa

*muʃiwo (虫を) >muʃi · u>muʃʷ u>muʃsu

*usuwa (臼は) >usu · wa>uʃʷwa>uʃsa

鼻音化

宮古諸方言の語末の *mi は、母音 i が音消失し、成節的な m になる。語末に成節的な m を有する名詞にとりたて助辞 wa, 格助辞 wo が後接するとき、成節的な m は助辞の頭子音 w を完全同化させて鼻音 m にかえている。

mimiwa (耳は) >mim · wa>mimma

mimiwo (耳を) >mim · u>mimmu

宮古諸方言の語末の *ni, *nu は、母音 i, u が音消失し、成節的な n になる。語末に成節的な n を有する名詞にとりたて助辞 wa, 格助辞 wo が後接するとき、成節的な n は助辞の頭子音 w を完全同化させて鼻音 n にかえている。

inuwa (犬は) >iŋ · wa>iŋna

dzeniwa²⁴⁾ (銭は) >dziŋ · wa>dziŋna

破擦音化

*tʃi, *tsu, *dʒi, *dzu は、母音 *i, *u が摩擦音化し、結合する歯茎破擦音と同化して成節的な子音 tʃ, dʒ になる。名詞末尾に成節的な tʃ, dʒ を有する名詞にとりたて助辞 wa, 格助辞 wo が後接するとき、助辞の頭子音 w を完全進行同化させて破擦音にかえている。*dʒira の音連続でもおなじ変化がおきている。

*patʃiwa (蜂は) >patʃ · wa>patʃ · wa>patʃsa

*matsuwa (松は) >matʃ · wa>mattsa

*matʃija (町屋) >matʃ · ja>matʃ · ja>mattʃa

*midzuwa (水は) >midʒ · wa>middza

*todʒiwa (妻は) >tudʒ · wa>tudʒ · wa>tuddza

*kud3ira (鯨) > fd3zra > fdzra > fddza

後部歯茎摩擦音 *tʃ, *dʒ が歯茎破裂音 ts, dz であらわれるのは、摩擦音化した ʃ, ʒ が逆行同化によって結合する tʃ, dʒ の調音点を後部歯茎から歯茎に変えて音融合し、成節的な tʃ, dz ができたからである。原則として子音の遠隔同化はみられないので、tʃ, dz に母音は後続していないとみるべきであろう。

5 音消失

単語は、1 個以上のフォネームによって構成されている音節が 1 個もしくは 2 個以上つながってできている。その単語を構成する複数のフォネームのうちの特定の位置のフォネームが脱落する現象を音消失 lost of phoneme という。脱落するフォネームの単語内での位置によって語頭音消失 aphaeresis, 語中音消失 syncope, 語末音消失 apocope がある。南琉球方言には語頭音消失, 語中音消失, 語末音消失がみられる。

5.1 語頭音消失

南琉球方言の語頭音消失の代表的な例は、与那国島にみられる、語頭の無声子音 *p, *s, *ts と狭母音 i, u の結合した音節の消失であろう。与那国島方言では語頭音節の消失によって第 2 音節めの無声破裂音が喉頭音化する異化の現象が同時に進行している。

与那国島方言の語頭音節消失は、語頭音節の狭母音 i, u の無性化とその後の弱化、それにともなう語頭音節の促音化、促音の弱化によって、最終的に語頭音節が消失したのではないかとかんがえる。

- | | |
|----------------------------------|-----------|
| *tsuka (柄) > tsuk'a > kk'a > k'a | ・ 語頭音節の脱落 |
| *pito (人) > pjt'u > tt'u > t'u | ・ 語頭音節の脱落 |

無声子音と狭母音の結合した語頭音節に無声子音ではじまる音節が後続するとき、語頭音節の狭母音は無声音化する。とくに語頭子音が h, s などの無声摩擦音のばあい、後続の破裂音が喉頭音化してあらわれる。第2音節めの喉頭音化した子音は、はじめは音環境に依存してあらわれるアロフォンであったが、語頭音節が弱化して消失すると、喉頭音化した子音は、音環境に依存しないフォネームとして確立される。語頭音節の消失にともなって後続子音があらたな韻質を獲得したフォネームとして生成され、破裂音 t が喉頭音化した t' と喉頭音化しない ʔ とに分裂したのである。

呼気流がつよい方言ほど語頭の摩擦音と無声化母音の持続部でおおくの呼気がながれてしまうが、おそらく、後続の破裂音の調音に際して声門をせばめたり、閉鎖したりして呼気の浪費をふせいだ結果、破裂音が喉頭音化してあらわれやすくなるとかんがえる。

- *omote (顔・おもて) > umuti > mutʃi ・語頭oの弱化による脱落
- *ura (おまえ) > yra > yva > yva > wa: ・語頭uの摩擦音化と弱化と融合

5.2 語中音消失

- *kagami (鏡) > *kayam > kaam ・gの摩擦音化と弱化による脱落
- *taka (鷹) > taha > taa ・kの摩擦音化と弱化による脱落
- *abura (油) > *abyra > ayra > ayva > ava > aba ・uの摩擦音化と破裂音化
- *miso (味噌) > msu ・iの脱落と同化

宮古伊良部島仲地方言では語中の両側を広母音 a によつてはさまれた軟口蓋破裂音 g の音消失した母音連続 aa がみられる。同様に、両側を a ではさまれた k も音消失して、母音連続 aa がみられる。音環境を同じくする軟口蓋破裂音 g, k の音消失がみられることから、仲地方言では破裂音の閉鎖が開放されて軟口蓋摩擦音 ɣ, x になり、さらに狭めが開放されて摩擦音が消失して母音連続 aa になったとかんがえる。きしみ声 creaky voice が二つの母音のあいだを区切っている。これまできしみ声を喉頭破裂音とみていたが、taa に格助

辞 wo が後接すると taaju となってあらわれる。これまでこの母音連続を音韻的に /taʔa/ とみなし、音節構造を /CVCV/ としたが、/CVCV/ なら格助辞が ju 後接すると, pano: (花を) のように格助辞 wo と語末の母音 a が融合して /taʔo:/ となるはずである。しかし、実際には taaju であるから、この単語の音節構造は /CVV/ であり、したがって taa (鷹) の aa は二重母音のような母音連続なのである。

5.3 語末音消失

*pabu (ハブ) >pay>paɸ>pau>po: ・v の弱まりによる u への変化と同化

*mimi (耳) > mīm

- ・破裂音pの接近音化と同化

宮古池間島方言の *po: (蛇・ハブ) は、呼気流のつよまりによって bu から生じた唇歯摩擦音 v がその後の語中での呼気流のよわまりによって摩擦がよわまり、v を経て母音 u になり、さらに二重母音 au の相互同化によってできた語形である。po: になることによって祖形にあった *pabu の b が完全に消失している。

宮古諸方言では、*mimi (首) > mim, *inu (犬) > in などに見られるように語末の狭母音 i, u が消失して閉音節語をつくりだしている。

6 音挿入

音挿入は、連続する2個のフォネームの中間に別のフォネームが発生して挿入されたり、単語の語頭に別のフォネームが挿入されたり、あるいは、語末に別のフォネームが挿入されたりする現象である。挿入されるフォネームの位置によって語頭音挿入 *prothesis*、語中音挿入 *epenthesis*、語末音挿入 *epithesis* がある。南琉球方言には語中音挿入と語末音挿入がみられる²⁵⁾。

6.1 語中音挿入

*i, *e と結合する波照間島方言, 白保方言の語中の *g は鼻音化しているが,

a と結合する g のばあい、g のまえに ŋ が音挿入されている。ŋ 音挿入がどのような要因によって、どのような過程をへたものなのか明確なことはわからないが、gi, ge の鼻音化と連動するものであるとかがえる。

kangaN (鏡), pangama (羽釜), dongu (道具), sangarı (坂・下がり
の転) [石垣市白保]

語中の w は、はやい時期に唇音退化によって音消失しているの、宮古諸方言のばあい、対格の格助辞 wo, とりたて助辞 wa の w も消失していた可能性がある。そうだとすると、w をのぞいた音韻変化をかんがえなければいけないし、とりたて助辞 wa のばあいも同様にかんがえる必要がある。語末に成節的な m, n, f, v, s, ts, dz を有する名詞にこれら助辞が後接するときの変化は、完全進行同化 (m・wa>mma) ではなく、音挿入である。このばあいの音挿入は、わたり音のフォネーム化であり、「連声 sandhi」ともよばれる現象になるのだろう。

mimi・a (耳は) >miɸ・a>miɸma
inu・a (犬は) >iɸ・a>iɸna
kobu・a (昆布は) >kuy・a>kuyva
jaku・a (厄は) >jaf・a>jaffa
uɸi・a (牛は) >uɸ・a>uɸsa
matsu・a (牛は) >matɕ・a>mattsa
midzu・a (水は) >midz・a>middza

6.2 語末音挿入

波照間島方言の paN (歯) などにみられる N 音挿入が南琉球方言の語末音挿入としてよく知られる。波照間方言の語末音挿入が [k̚ɸi] (紙・波照間), [ta̠r'e:] (鹽・小浜²⁷⁾) の ɸ とおなじくはげしい呼気による声門の開放 (無声音化・進行同化) と、口蓋垂の開放 (鼻音化・異化) だとすれば、先行音節の無声性に端を発した進行同化と異化とその後の音分割による音挿入である。

*pa: > p̚ɸi > p̚ɸa > pa̠ > paN

先述したように、宮古島平良下里方言などにみられる *miz (身) も語末音挿入の例である。波照間島の paN (歯) などの音挿入も、miz (身) にみる音挿入も、音分割の結果、音挿入されたものである。

宮古諸方言では成節的な dz の持続部の摩擦がよわくなり持続部の後半に₁が音挿入されたようになる。おなじく、成節的な s, ts が語末、あるいは、有声音のまえにあらわれるとき、持続部の後半が有声音になって₁が挿入されたようになる。同じく、成節的な f が語末、あるいは有声音のまえにあらわれるとき、持続部の後半部が有声音になった fɸ のような発音になって、唇歯接近音 ɸ が音挿入される。音節主音的な ɸ は、調音的な特徴の近似する円唇奥舌母音 u への統合が進行している。成節的な m, n, v には同様の音挿入はみられない。ʃi > s > s₁, tʃi > tʃs > ts > ts₁, dʒi > dʒz > dz > dz₁, ku > ky > f > fɸ > fu の音挿入は、開音節構造を主とする方言にあって、音節構造に制約されつつ、無声の摩擦音、破擦音、有聲の破擦音という調音上の特徴とが重なってひきおこされた変化である。

琉球方言の個々のフォネームの実態がどのようなものであるか、それぞれがさまざまな単語や音節構造のなかで他のフォネームに対してどのようにふるまい、自らの特性をどう発露しているのかを、たくさんの下位方言の変異のなかに位置づけ対比しながらいていねいにみていくと、琉球方言のさまざまな特徴をもったフォネームや多様な音声現象がどのようにして生成されてきたかを解明し説明することができるのではないだろうか。そのことが琉球方言研究を豊かにし、ひいては一般言語学にも寄与するのだとおもう。本稿はそのための第一歩であり、ラフスケッチである。

追 記

狩俣が琉球大学国文科に入学した翌年の1975年3月仲宗根政善、比嘉龜盛、仲村龍人、嘉味田宗栄の4教授がそろって退官された。今年1月に亡くなられた玉城政美さんはその4月に琉球大学に嘉味田宗栄先生の後任として、関根賢

司先生が比嘉亀盛先生の後任として赴任された。さらにその翌年の4月に上里賢一さんが仲村龍人先生の後任として、仲宗根政善先生の後任として上村幸雄先生が赴任された。狩俣の入学時にいらっしゃった湧上元雄先生も岡本恵徳先生も池宮正治先生も仲程昌徳先生も退官なされた。それにしても、旧国文、旧日東を引き継ぐ琉球アジア文化専攻はこの1、2年に、1974年前後にもおとらずおおきくかわった。

玉城さんと上里さんには学生時代にずいぶんご迷惑をおかけしたが、大学卒業後に上京したのち、沖縄に戻ってきてからも、琉大国文に職をえてさらにお世話になった。玉城さんの講義や研究会に参加していろいろとまなんだ。「オモロの条件形」は、玉城さんの歌形論をまなぶことなしには書けなかった思い出深い論文である。

【注】

-
- ¹ addition of phonemes. 添加ともいう。
 - ² lost of phonemes. 無音化、黙音化ともいう。
 - ³ contraction. 縮約、凝縮、収約ともいう。
 - ⁴ metathesis. 音転倒、音転置ともいう。
 - ⁵ 琉球方言でおきた音韻変化の要因については、上村幸雄（1989）、かりまた（2009）、同（2006）を参照。
 - ⁶ 同化を「条件変化 conditioned change」とよび、異化を「自生的変化 spontaneous change」あるいは「無条件変化 unconditioned change」とよぶこともできそうであるが、「異化」のなかには、語頭や語中にかぎっておこるものがあり、単語内での位置を音韻変化の条件とみることもできる。現段階では保留しておく。
 - ⁷ これらの単語は、さらに後続の *r を v に同化させて、*ura>vva, *ure>vvi, *uranu>vvan の語形ができていく。
 - ⁸ 沖縄島名護市幸喜方言でも pau（ハブ）の語形があり、類似の変化がおきたようにみえる。しかし、幸喜方言では pabu>paβu>pau だけでなく、

nabe (鍋) > nabi > naβi > nawi > nai, soba (側) > suba > suβa > suwa のように b の摩擦音化, 接近音化, 脱唇音化がおきている。幸喜方言のばあい, 語中の b に限定されているが, 先行, 後続の母音の韻質をとわない音韻変化である。それに対して, 宮古諸方言のばあい, 音消失は bu, gu に限られているが, bu, gu であれば語頭, 語中をとわない音韻変化である。ku, pu でも平行的な音韻変化がみられる。

- ⁹ 当初, *eu が音融合したとかがえていたが, workshop on Ryukyuan languages and Linguistic research (UCLA, 23-25 October 2009) の研究発表の席で *e が狭母音化したのちに音融合を起こしたのではないかと Thomas Pellard (EHES CRLADO) さんに指摘していただいた。指摘のとおり e が狭母音化したあとに音融合したとみる方が頭子音の口蓋性の保持をより合理的に説明できる。本稿では Thomas さんの指摘を反映させた。
- ¹⁰ 類似の変化が沖永良部島和泊町国頭集落の方言および周辺方言でもみられる。国頭方言では φju: (今日) があらわれ, 他の沖永良部島方言では hju: であらわれる。国頭方言 φju: の φj は両唇の摩擦音 φ が口蓋音化したもの, あるいは歯茎摩擦音 ç が唇音化したもので, 唇音化と口蓋音化を同時に実現した摩擦音である。第二次基本母音 y の半母音化 (接近音化) した ɥ が無声音化して摩擦音になったものであるが, これをあらわす音声記号がないので, 仮に φj と表記する。
- ¹¹ 伊良部島佐和田方言では音分割する前段階の m₁: であらわれている。とりたてて助辞 wa が後接すると, m₁zza (身は) となり, 持続の後半部分の摩擦がつよくなって音分割された語形になり, 後接するとりたてて助辞の頭子音を摩擦音化させている。z の摩擦のよわまった有声の歯茎接近音が子音と結合して音節主音的に機能するばあいを ₁ と表記する。これはかりまた (2009)、上村幸雄 (1989) などで舌先母音とよび, 崎山理 (1967) が舌尖母音とよんでいるものである。本稿では摩擦のよわいアロフォンを ₁ と表記し, 摩擦のつよいアロフォンを z と表記し, 無声音のアロフォンを s と表記している。
- ¹² 大神島方言では他の宮古八重山諸方言と同様に唇歯の接近音 *w が破裂音

化してbに変化し、さらに、無声音化*w>b>pしているので、無声音化はwの破裂音化の後の異化である。

- ¹³ かりまた (1993), かりまた (2009) を参照。
- ¹⁴ かりまた (2009) を参照。
- ¹⁵ 奄美大島瀬戸内町諸鈍方言をふくむ奄美大島南部方言には *sake>séhë: (酒), *woke>wéhë: (桶) などに見られるような遠隔相互同化がみられる。
- ¹⁶ かりまた (2007) で、とりたて助辞 wa を ja, 格助辞 wu を ju としたが, tskʃsu (月夜), mizɜumi (新嫁) などの語形をかながえて、本稿では wa, wo とした。すなわち、先行音節 s の進行同化で後続 j が摩擦音化すると j の口蓋音性が維持されて ʃu があらわれ、先行音節 z の進行同化で後続 j が摩擦音化すると j の口蓋音性が維持されて ɜu があらわれるのに対して、wo が後接すると iwo>zwo>zzu のように口蓋音性は生じない。
- ¹⁷ 宮古諸方言の二重母音の同化、非同化については名嘉真三成・かりまたしげひさ (1984) を参照。
- ¹⁸ 語中の両唇接近音 w は、唇音退化によって消失していた可能性がある。uwa の同化のばあい、w と先行の u は韻質が近似するので同化の結果をおおきくかえないとかがえる。なお、a と結合するばあいもふくめて語中の w は、消失しているが、先行母音が u のばあいはおそくまでのこっていた可能性もある。
- ¹⁹ 宮古諸方言では語末に a, i, u を有する名詞にとりたて助辞 wa が後接するとき、相互同化をおこし、音融合がみられるが、母音消失によって生じた成節的な子音が語末にあらわれる名詞にとりたて助辞 wa があらわれるときは、完全進行同化による摩擦音化、鼻音化、破擦音化などの変化がみられる。
- ²⁰ 語中の *pu は、琉球祖語、あるいは宮古八重山祖方言の段階で摩擦音化、有声音化、唇音退化によって消失し、母音 u の単独音節になっている。
- ²¹ 狩俣自身の調査した字石垣の語例だけでなく、『石垣方言辞典』の語例を参照した。
- ²² 多良間島方言や伊良部島佐和田方言にみられるそり舌音化について今回は

触れない。

- ²³ 『石垣方言辞典』の [ɸɸɸa] 倉, [ɸɸɸuʔiru] 黒色などの [ɸ]は音挿入による新しい語形であろう。
- ²⁴ dʒin の祖形を*dzeni とみると、狭母音化した i の影響で dz が口蓋音化して調音点が歯茎から後部歯茎へと移動（隣接逆行部分同化）したとみるべきであろう。*dzeni>dʒin>dʒin (銭)。同様のことが*ase>asi>aʃi (汗)でもおきている。
- ²⁵ 北琉球方言には h の語頭音挿入の例がみられる。かりまた (2009, p.302) 同 (2010) でもふれた。
- ²⁶ 波照間と小浜の用例は宮良當壯 (1930) から。

【参考文献】

- 上村幸雄 (1990) 『日本語の母音, 子音, 音節 調音運動の実験音声学的研究』国立国語研究所報告100, 共著
- 上村幸雄 (1989) 「音韻変化はどのようにしてひきおこされるか (2) - 琉球列島諸方言のばあい -」『沖縄言語研究センター資料No.79』沖縄言語研究センター
- 上村幸雄 (1978) 『X線映画資料による母音の発音の研究, フォネーム研究序説』国立国語研究所報告60, 共著
- 加治工真市 (1984) 「八重山諸方言概説」『講座方言学10沖縄・奄美の方言』国書刊行会
- かりまたしげひさ (2010) 「北琉球方言における同化と異化」『国際沖縄研究』創刊号, 琉球大学国際沖縄研究所
- かりまたしげひさ (2009) 「琉球語音韻変化の研究」『ことばの科学12』むぎ書房
- かりまたしげひさ (2006) 「琉球語の狭母音化の要因をかんがえる - 空気力学的な条件と筋弾性的な条件 -」『沖縄文化』第40巻2号
- かりまたしげひさ (2005) 「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」『日本東洋文化論集』第11号, 琉球大学法文学部紀要

- かりまたしげひさ（1999）「音声の面からみた琉球諸方言」『ことばの科学9』
むぎ書房
- かりまたしげひさ（1993）「大神島方言のフォネームについて」『琉球列島に
おける音声の収集と研究』琉球列島班研究成果報告書
- 名嘉真三成・かりまたしげひさ（1984）「琉球宮古諸方言母音融合の調査報
告」『沖縄言語研究センター資料No.49』
- 日本音聲学会編（1976）『音聲學大辞典』三修社
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1996）『言語学大辞典（術語編）』三省堂
- 宮城信勇（2003）『沖縄石垣方言辞典』沖縄タイムス社
- 宮良當壯（1930）『八重山語彙』東洋文庫
- 琉球方言研究クラブ（2005）『琉大方言－石垣白保方言の音韻体系－』第20号